

四畳半の幽霊



夢遊星人

くるえるストーリーズ

四畳半の幽霊

(1)

古いアパートであった。大きな車が少し離れた道路を行く度に、グラグラ揺れた。知らない人ならば、随分地震の多い土地だと思いに違いない。しかし、内部は適当に改装をほどこして、まあまあ、人の住める建物になっていた。勿論、方々立てつけの悪いことは夥（おびただ）しい。出入り口の戸に錠を差すのにも、一呼吸いる。

私はこういうアパートが好きであった。幾人もの先住民の生活の跡が、壁や畳や柱に染みついでいて、その辺から黒々と、失われた時が立ち昇ってくるようである。もっとも、隣家の風呂焚き口から、濛々と立ち昇る薪の煙には閉口したが。

持ち運ぶ荷物とて、布団と炬燵と若干の書籍ぐらだから、引越は至極あっさりとした。世話好きな大家の主婦さんが、部屋の掃除をしてくれた。綺麗に使って下さい、と云った。これ以上穢くなりようのない室だったが。私は先住者について訊いた。学生さんという応えだった。しかし、なぜか口を濁らせた。

片づけを済ませてしまうと、私は煙草を啜えて、窓に腰を下した。都会近郊に特有の、色彩のない、退屈な環境であった。一分と眼を外に留めておくことが出来ない。空は晴れ上っていたが、その下に広がる灰色の家並は、生色を欠いて、メランコリックであった。壁を青く塗りかえた部屋の中に、まだ安らぎがあった。

しかし、私には風景などは大した問題ではなかった。好き好んで、こうしたゴミゴミした、人間の住み腐れたような地区に住もうとしているのであるから。私は見知らぬ人間の間に身を置けばよかった。ただ身を置くだけでなく、それと知られず巢食うことを欲した。そこに一種の精神的解放を求めていた。アパートを遍歴する私にとって、風景は人間であった。

新しい室に越した最初の夜というのは、なにがなしか新鮮な興奮を覚えるものである。暫くは、不安とも、ロマンとも、期待ともつかぬ気持ちに想像を煽られて、なかなか寝つかれない。隣室の人もまだ知らない。その微かな物音でも気に掛かる。もっとも、隣の方でも、暫くは新しい住人が気に掛かるであろうが。男か女か、という想像をさせる場合はなおさらである。私の場合、既に隣が年少の大工であることを知っていたが。

しかし、昼間の疲れで、やがて寝こんでしまった。どれほどの時が経ったか知らない。眠りに陥ちてから、まだたいして間がないような気がする。私は戸口に人の入ってくる気配を感じた。戸口の所は畳半分ほどの板の間になっていたが、どうやらそこに人が立っているらしい。錠を差し忘れたという不安が起った。しかし、私はまだ仰向けに、頭を南に向けて寝たままであった。戸口は室の南に当たったから、その何者かは、私の枕の右斜め上の方向に立っていたことになる。

私には、その者の姿がぼんやりと見えだした。白い影のように立っていた。貌も服の様子も判然（はっきり）としなかったが、その気配から男であるらしかった。男の動く気配が伝わった。私は吃驚して、はね起きようとしたが、その時自分の体が棒のように硬直して、頭一つ動かさないのに気づいた。後に考えると、私は眼さえも開いていなかったようだ。

男はスタスタと、私の寝ている方へ近寄ってきた。踏まれる、とその時私は思った。男は私を踏みつけて通り過ぎていった。男の足が私の上に乗ったと思われる瞬間、軽い電気のような衝撃が、全身を走った。暫くして、私は硬直が解けて、寝返りを打った。湿った綿のような疲労を、身体に感じた。起き上って、裸電球を捻った。勿論、人の姿などはどこにもない。錠もしっかり掛かっていた。入居早々、いやな夢を見たものだ。私は舌打ちをして寢床に戻り、今度は朝までぐっすり寝た。

（Ⅱ）

翌朝、目覚めた時には、熟睡のお蔭で、昨夜の夢のしこりはすっかり拭い去られていた。平凡な一日が始まる。某出版社に就社し、日暮れまで校正の仕事をしている。疲れて帰って来ると、これといった趣味もないので、早めに寝てしまう。眠ることがこれ程の快楽であるとは、怠惰な学生時代には思いも寄らなかった。一日9時間の睡眠をとらないと、私はその日一日、苛々して、不愉快なのである。だからこれまで、寝台券をとらずに夜行列車で旅をしたことがない。眠りだけは、私の唯一の贅沢であった。

そのアパートに入居した翌晩も、十時にはすんなりと寝に就いた。その時まで、前の晩の不安な夢は、少しも私の心に翳りを落さなかった。隣の大工の若者とは言葉を交わしていたので、そう隣室が気になることもなかった。やがて深い、健康な眠りが、黒い翼で私を覆い包んでいった。嵐も雷鳴も届くまい、眠りの沼底に私は沈んでいった。

私は今度も、人の気配に眠りを破られた。私の右側の壁の柱に、なにやら白いものが蹲っているらしい。月明りでもあるのか、室の中はボオーと薄明るかった。やはり体の自由は利かない。しかしそのものの存在は、はっきり心の眼に映った。その姿は、どうやら若い男が膝をかかえて、柱に凭れているようである。男の顔は見たこともない顔である。洞（うつろ）な眼で、凝と宙を見据えている。何か思い悩んでいる顔であった。

こんな顔を、私はどこかで見たことがあると思った。電車の中で、角ばった顔の青白い青年が、寝そべるような、傍若無人な坐り方をしているのを見たことがある。一見、倣岸不遜の表れのように思われたが、その顔の表情、いや、まったくの無表情を見て、そこに深い人生への絶望がありありと見てとれた。周りの人間へのまったくの無関心、さらに言えば、人間社会への一切の希望を失った虚無の顔であった。今その同じ放心した無表情を宙に向けて、この深夜の闖入者は、柱に凭れかかっていた。私の存在などは、まるで眼中にないようである。

私は仰向けに寝ていたので、この若者の様子は斜めから見ていたはずであるが、後で思い出すと、テレビか映画を見るように眼前に映っていた。よく見ると青年の額には一筋の皺が刻まれ、眼にはうつろな悲哀のようなものが漂っている。そして左の手がズボンの中へもぐりこんでい

るのは、どうやら自らを慰めているようなのだ。それだけが彼にとって、生きていることの唯一の証であるかのように。こんな幽霊は、初めて見た。

夢であることは分っていても、やはり幽霊は怖い。私は胸苦しい圧迫感としばらく闘っていた。すると男の幻はふいと消え去って、目が開き、同時に体の自由が利くようになった。寝返りをうって、今の夢について考えながら、いつの間にかまた眠りに落ち、目覚めると朝になっていた。普段より三十分は寝過ごしていた。私は顔を洗うのももどかしく、室を飛び出した。

(III)

私はその日、大家さんから部屋の前の住人について、詳しい話を聞きだそうと考えていた。ところが、同僚との付き合い酒に振り回されて、到頭帰宅は十時過ぎになってしまった。かなり酔いが回っていて、昨夜来敷いたままの布団に、そのまま倒れこんでしまった。

頭の上でギシギシ、ベッドの鳴るような音がする。その音が朦朧とした意識の中に響きだすと、眠りが急速に引いて行くのが判った。畜生、またか、そう呟きかけた途端、変だと気づいた。ここは三日前越したばかりの部屋だ。しかも二階だ。この音に悩まされたのは、前のアパートの一階の部屋だ。妙に悩ましい、深夜の騒音だったが。

私は着換えもせず、ネクタイを緩めたまま、布団の上につ伏せで、寝こんでしまっていた。そのうつぶせの姿勢のまま、ある光景がありありと眼前に浮かんできた。それは部屋の中の光景である。今誰かがテーブルを足台にして、天井の細い角材に通したロープを輪にして、首に巻きつけているのである。ロープが引っぱられるたびに、天井が軋んでいる。そして全身がぶら下がると、ひときわ大きな軋みが起こった。細い角材は不思議と耐えている。

最初私は、冷たい恐怖が全身を走ったが、今なら助けられるという気持が打ち勝ち、酔いのせいか妙に重い体を、一息に起こして立ち上がった。揺れている男の体を、両腕で抱くようにして支え、テーブルの上へ引き上げた。男の体は生暖かかった。男はキョトンとした眼で、もとのテーブルに力無く立っている。首にきつく巻いたロープをほどこうともしない。

「ダメではないですか、死んでは」

私は誰でも思いつくような言葉しか、かけられなかった。こんなに間近に面と向かって見ると、二十歳前後であろうか、青年のまだどこかに学生らしさを残した容貌が、けっこう柔和であることに気づいた。何か絶望するようなことでもなければ、好青年でありえたかもしれない。

「試験にでも落ちたんですか」

青年はうなずいたようだった。

「私も、就職試験なら、随分落ちましたよ。落ちるたびに死んでるわけに行かないでしょう」

妙なことに、私と青年はまだ立ったままだった。ここは青年の部屋であって、部屋の隅にはごたごたと生活の道具や、ゴミそのものが積まれていて、一角には参考書のような本が散らばっていた。家具などはほとんど無いのは、私とて同じであったが。

「とにかく、その首の縄をどうにかしませんか」

青年は外そうとしたが、なかなか堅くてほどけないのを、手伝ってほどいた。青年はテーブル

を降りると、私が二日目の夜に見たのとそっくりの姿勢で、壁の柱に寄りかかった。

「大学に落ちたのです」

と小さな声で言った。

「そうですか。学生さんと聞いていましたが」

「一度入って、つまらなくなっ、国立を受けなおしたのです。これで三年目です」

「それは大変なことでした」と、私は今の事情を忘れて、同情した。

「しかし、死ぬことはないでしょう」と付け足した。

「今年が最後です」

青年はきっぱりと言った。そしてあの虚無的な表情に戻って、宙を見すえた。

「他の大学ではダメですか」

「一度やめて、もうどこにも戻る所がないんです」

その言葉には、悲哀の籠ったプライドが感じられた。先がふさがれ、後へも引けず、いわば罫にはまったような行きづまりへと、この青年は自らを追いこんで行ったのだ。

「人生は考えようですから・・・」

とは言ってみたものの、後の言葉が出せなかった。青年は始めから視線を合わせることを避けていたが、やはりどこを見てもない、いわば魚のような眼差しを宙に向けていた。映画の画面でも見ているような気がした。誰か、第三者と会話している場面を見ているような。その第三者が私のものである。

すると、その画面がだんだん薄れていくような、非現実感が生まれ、心と私は夢から我に返った。私はやはり、うつ伏せのまま、布団にだらしなく倒れていた。起き上がって、胡座をかき、あらためて見回してみた。青いぎらぎらする壁と、薄汚れた天井、三日前から住みつき始めたわが四畳半の部屋である。

何一つ異状はない。もとより何一つない部屋であるから。

(iv)

四、五日して、近所の神社の祭礼で、夜店が出ている通りをぶらぶら歩いていると、隣の部屋の大工の青年に出逢った。親しげに話しかけてきたので、雑談をしているうちに、彼に例の学生のことを聞いてみようかという気になった。幽霊や夢の話をするのは憚られたので、さりげなく、今私のいる部屋には、前にどんな人がいたのか、と聞いてみた。

「学生でしたよ。こちらが入るずっと前からいて、K大を受け直すって、3年も浪人したそうです」

大工の青年は、年下のせいもあって、なんの引っかけりもなく、丁寧に答えた。

「今年も落ちて、結局、田舎に帰ったということです」

「田舎に帰ったんですか。それでは、何事もなかったんですね」

私の声には、意外だと言う響きがあったようだ。まだ二十歳前の、これも田舎から出て来ているという大工は、初めて眼に怪訝そうな、問うような光を浮かべた。私は取り繕うため、

「うん、よく不幸な話があるもんで」

大工はちょっと眼を夜店にやっってから、また私のほうを向き、

「変な話というのならありましたよ」

と言った。眼はまた率直な輝きを帯びていた。

「あの人の、明日は帰るという晩でした。あの人はその前から、受験に失敗したあとですが、夜中に突然歌を歌いだすんです。それも、何曲も、たてつづけに。その歌と言うのが、流行歌ではなくて、なんて言いますか、学校で習うやつ、唱歌ですか、その唱歌を、兎おいしかの山とか、けっこう大声で歌うんです。まいりました。大家さんが、静かにしてくださいと言いに来ると、ハイ、と言っておとなしくなるんですが、また次の晩にそれをやるんです」

大工は一息継いだ。それから、調子を改めて、

「それで、明日部屋を出ると言うことになって、ホッとしましたよ。その晩のことなんです。雑誌か何かを読んで夜更かししていたところ、妙にお隣が静かなんです。それはいいんですが、突然です、何の理由もなく体がぞくぞくして来たんです。雑誌を読んでいると、後ろから誰かがじっとにらみつけているような、寒気がして来たんです。そしたら、体中が自然とガタガタ震えてきました。余りの恐さに、雑誌など読んでいられなくなりました。ふと、お隣さんが、やなことを考えているのではないかと思いました。止めに入るほど親しくはありませんので、どうにもなりません。布団の中にもぐりこんで、早く夜が明けてくれ、何事もなく終わってくれと祈りながら、ほとんど一睡もできませんでした。翌朝、仕事があるので早く出ましたが、気になりながら、お隣の戸をたたく勇気は出ませんでした。帰ってきて、大家さんから、両親が迎えに来て、無事引き払ったと聞いて、ほんとにホッとしましたよ」

私は大工の話聞いてから、予知夢とは反対のことを考えるようになった。そんなものがあるかどうかは知らないが、仮に過去夢というものがあって、過去を変えられるならば、人類の不幸を後から修正できはしまいか。私の夢が、ひょっとしてあの学生を救ったのならば、それも荒唐無稽な仮説ではないであろう。彼がその後どうなったかは知らないが、その時は、私もまた、若い大工と同様に、心からホットしたのである。

(完)